

■読みに困難のある子どもへの実践事例

読みの困難を抱えた子どもへの読書活動での活用

松江市立意東小学校
井上 賞子

研究の目的

読みの困難を抱えていることが予想される子どもたちに、マルチメディアDAISY図書を使った読書の環境を提案することで、本の世界を楽しむ体験を広げることを目的とします。

研究準備

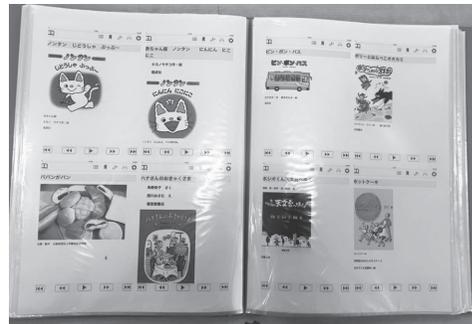
(1) わいわい文庫索引の作成

タイトルだけでは「どんな本なのか」のイメージがわからないと思われたため、表紙の画像とタイトルを印刷した一覧を作成し、ファイルに閉じておきました。

※図書室で本を手にとって探すように、ファイルをめくりながら表紙を見て、「読んでみたいな」という本を選びやすくしたいと考えました。



「わいわい文庫」
ファイル



「わいわい文庫」ファイルの中身



ファイルをめくって読みたい本を探す

(2) ルールの設定

①図書館司書か担任がいる時に、許可を得て使う。

②時間内に読み終えない時は、「〇ページまで読みました」ということを司書か担任に伝える。

※それを記録し、次回は続きから読め

るようにしておきました。

※端末の数が少ないため、複数の児童が同じ端末を使うことが想定されたため、「続き」がどこからだったか確認できるようにしたいと考えました。

③他に人がいる中で読む際は、ヘッドホンを利用する。

※図書室や教室などで、みんなと一緒にの場と時間に読書を楽しむためには、音声が他の子の読書の妨げにならないようにする必要があると考えました。

(3) 辞書アプリ、メモアプリの準備

例解学習国語辞典、7note、ロイロノート、SimpleMind+といったアプリを準備しておきました。

※読んでいて意味の分からない言葉が出てきた時に、すぐ調べられたり、気になったところや面白かったところのメモが取れるようにしたりしておくことで、より内容の理解を支え、読書を通じて自分の考えを持つことができるといった活動へもつなげていきたいと考えました。

活用の実態

(1) 対象

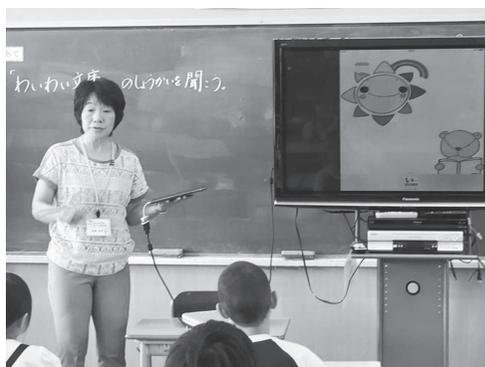
通常学級に在籍し、読みに困難を示す子ども（LDが要因として疑われるケース）

(2) 活用時間

- ・授業中の読書活動をする場面
- ・休み時間

(3) 活用場所

- ・図書室
- ・教室



活用の様子や効果

(1) 導入前の理解教育

- ・わいわい文庫導入の初年度ということもあり、対象となる子どものいる学級で、わいわい文庫の説明に合わせた理解教育の授業を行うことから始めました。
- ・担任からわいわい文庫の紹介に合わせ、紙の本では読みにくい人がいるということ、音声のサポートや見え方へのサポートがあることで本が読みやすくなる人がいることについて説明してもらいました。
- ・そのうえで、こうした方法があったほうが読みやすいという人、自分も

読むときに困っていたという人がいたら、わいわい文庫で読んでみようと呼びかけました。

(2) A君に見られた姿

<導入前の様子>

- ・日常から、読み飛ばしや読み間違いがとても多く、読書には苦手意識があった。
- ・読むことにとても時間がかかり、他の児童に比べて、読んでいる冊数は少なかった。
- ・読書記録を書く際にも、時間がかかり、内容がとらえられていなくて、覚えている言葉をつなぎ合わせていたため、不自然な文章になってしまいうことがあった。
- ・読み聞かせの後や、何度も授業で読んでいるものについては、適切な感想をしっかりと話すことができる。
- ・まじめで日常の学習にも熱心に取り組み、発言も意欲的にするが、テストになると過度に時間がかかる姿が見られた。しかし、問題を読み上げると、すらすらと回答することができていた。

<導入にあたって>

個別に使い方のレクチャーを行いました。

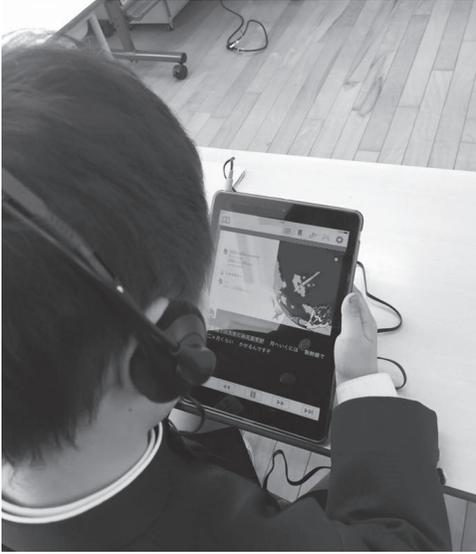
- ・表示については、いろいろな組み合わせを試してから、背景色は黒、文

字は白、ハイライトは赤を選んだ。

- ・索引ファイルを参照しながら、読んでみたい本を選び、検索で呼び出して再生させるというプロセスを練習した。

<導入後の様子>

- ・内容が難しいものや、ページ数が多いものであっても、最後まで集中して読むことができていた。
- ・音声を聞くだけでなく、目で追っていく姿が見られた。
- ・天文関係の本を読んでいたとき、「へえ……」「そうなんだ」「知らなかった」といったつぶやきが聞かれた。
- ・読み終わった後に内容の質問をいくつかしたところ、正しく答えることができていた。
- ・読書記録を書く際、すらすらと取り組むことができた。また、どんな本だったか、自分はどこに興味をもったかといった内容を、簡潔に書くことができていた。
- ・個別での体験の後、「教室でもこれで読みたい」という希望が出てきたので、ヘッドホンの使い方をレクチャーした。ヘッドホンをつけることで、教室での読書の時間にも、みんなの中でわいわい文庫を楽しむ姿が見られた。



考察

(1) A君においては、音の支援があることがスムーズな内容理解につながったと考えます。

- ・導入前の様子から、文字を音に変換していくことに過度の負担がかかっている状況が予測された。
- ・「なんでA君はテストになるとあんなに時間がかかるんだろう？」というのが、歴代の担任の共通した疑問

だったことから、日常の理解の力に比べて、「読んで情報を取得していく」ことに課題が大きかったこともうかがえる。

- ・まじめなA君は、読書活動のさかんな本校において、他の子どもたちのようにどんどん本を読んでいきたい、読書記録もたくさん書きたいという気持ちは持っていたと思う。しかし、学年が進むにつれて推奨本の文章量が増えていく中で、読みの困難がより顕著になり、自信を失っていたのではないだろうか。
- ・つぶやきながら文字をおっていく姿からは、するすると情報が文字から入ってくることに驚きながらも気持ちが高揚している様子がうかがわれた。
- ・「この方法なら読める」という実感が、「みんなの中でもこれで読みたい」という願いにもつながったのではないかと感じている。

(2) 担任による導入時の理解教育が行われていたことが、個別の場だけでなく日常の中での活用へつながったのではないかと考えます。

- 担任は学校全体の読書活動推進の中心的な存在です。「図書館の先生」として、前項の子どもたちが認知しています。その先生が「音がついて

いたり、ガイドが動いたりしたほうが読みやすい人は、これを使っていいんだよ」という話をしてくださったことは、本人はもちろん周囲の子どもたちにとっても、とても大きな意味があったと感じています。本人も周囲も、ごく自然に「iPadで読み上げる」ことを受け入れていました。

- 通常、こうした「みんなとは違う方法」を集団の中に持ち込むことには、抵抗感を持つ子どもも少なくありません。そこには、「何か言われるんじゃないか」「変に思われるんじゃないか」といった不安があります。だからこそ、教室の中で唯一の大人であり、子どもたちにとって強い影響力を持つ担任が、「これはOKなんだ」「こうした方法が必要な人がいるんだ」ということを明言することは、安心感につながったと考えます。

来年度へ向けて

- 今回報告したA君の他にも、校内には読みに困難があると思われる子どもたちが複数います。今年度の導入プロセスをフレームにして、他の学年でも担任が軸になっての導入を進めていきたいと思っています。

- 読みたい本を「選ぶ」というのは、読書の喜びの大きな要素の一つだと感じています。現在のわいわい文庫ファイルは、五十音順に表紙が並んでいる形にしていますが、内容も難易度もばらばらになってしまっていたので、選びにくいようです。

そこで、「物語」「ドキュメンタリー」「民話」といったカテゴリーで分けたり、難易度を星の数で示したりといった選びやすい工夫をして、ファイルを再考していきたいと思っています。

- 今はまだ「読める喜び」にとどまっていますが、ここからより能動的な活動につながっていくよう、辞書やメモの活用にもつなげていきたいと考えています。また、そのためのテンプレートの用意も考えています。
- また、わいわい文庫の体験を通じて「自分には音のサポートが必要だ」と実感した子どもたちが、他の学習場面でどう音声情報を得ていくかについての検証も、合わせておこなっていきたいと思っています。